令和７年度学校評価表

最終版

品川区立東海中学校	校長	丸谷	大輔
東海中学校校区教育協働委員会	委員長	望月	重信

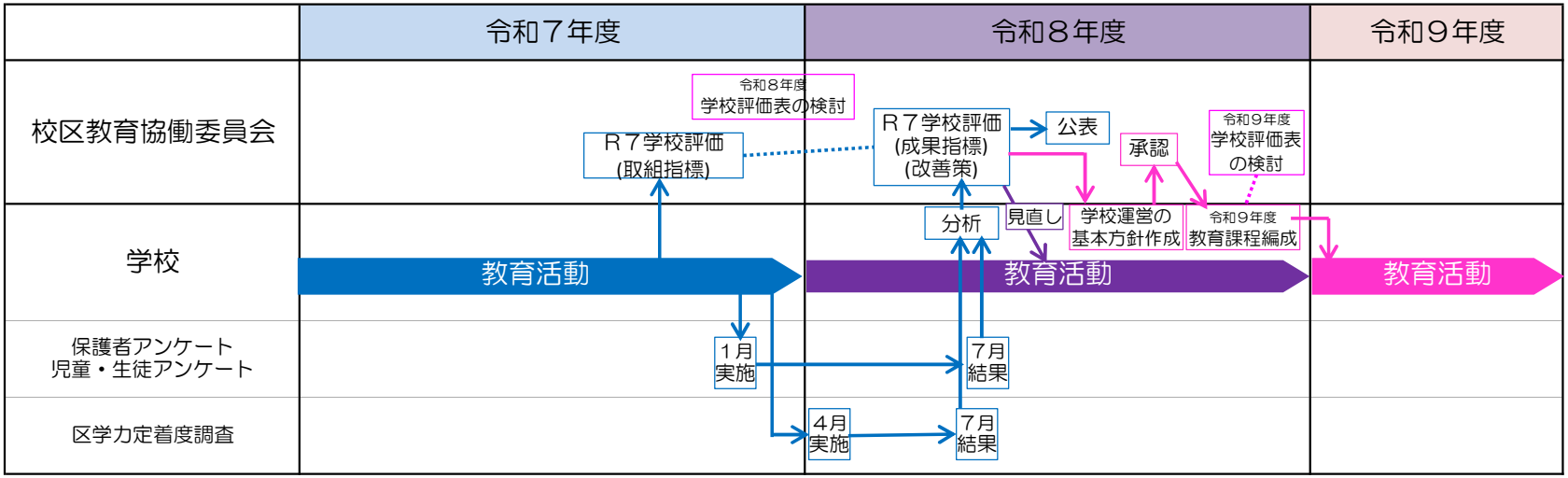
校区教育協働委員会は、品川区校区教育協働委員会設置要綱（改正 令和5年３月２４日 教育長決定 要綱第５号）に基づき、次に掲げる事項について、学校評価を行っています。

⑴ 学力に関すること。
⑵ 人間性や社会性に関すること。
⑶ 体力・健康に関すること。
⑷ いじめ防止の取組に関すること。
⑸ 特色ある教育活動に関すること。

学校評価を行う際、評価項目ごとに「成果指標」と「取組指標」を設定し、取組状況と取組によって表れた成果について把握しています。学校評価により浮き彫りになった学校の課題を委員会で共有し、改善策を考えました。

学校評価の結果を公表するとともに、今年度の取組の見直しや来年度の教育課程の編成に生かしていきます。

学校評価の流れ（※令和７年度の学校評価が令和８年度および令和９年度の教育活動につながる部分のみ表記しています。）



令和７年度　学校評価　品川区立東海中学校

評価項目１　学力に関すること

重点目標		基礎学力の定着・自学自習 落ち着いて学ぶ環境整備		
評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	落ち着いて学ぶ環境づくり（授業規律の徹底と朝読書）	ずいぶん落ち着いてきたが、教科・学年によってまだ差が見られる。	B	落ち着いた学校生活は、基本である。学習するにも生活するにも安心して生活できるようにしていく必要がある。改善はしてきて良い方向に向かっているので継続して指導に当たる。教員からの一方的な指導から自治、自分たちでと段階的に移行しつつある。
	朝読書の全校実施。（学期ごとの読書週間実施） 授業規律（学期はじめ・学期の振り返り）	朝読書については図書委員会を中心に取り組んだが、もう一歩であった。読書週間も確実に実施できた。 授業規律等は朝礼・集会等でも呼びかけ、振り返りもしてきた。繰り返すことで意識が高められたと考える。	B	
②	「わかる・できる」を目指す。	どの学年も全国の平均および区の平均を超えているものが多い。まずまずである。	B	平均的にはある程度のレベルを維持しているが、二瘤、場合によっては三瘤になっている。上位に位置するもそうだが、特に下位の生徒をどうするか考えなければならない。練習問題のレベルや量など更なる工夫や、興味・関心をいかに引き、維持させるか工夫をしていく。
	教師自身による教材研究・指導方法の工夫。（学期ごとのふりかえり）	教材研究等、努力はしていると考える。進度や評価等についても振り返った。	B	
	生徒自身による授業の受け方・学習の取り組み状況（学期の反省）	生徒自身による各教科における学期の振り返り・取組方について考えさせた。まだ塾頼み等、甘いところも見られる。	B	
③	学びの確実な定着・自学自習の定着。	呼びかけや掲示物等も作成するが、なかなか進まない。スペリングコンテストなど範囲が決まっているのになかなか取り組めない面もあり、学習の仕方について再度呼びかけた。	B	7年では1年間を通して学びの記録や反省・振り返りができる冊子を導入した。しっかりと検証し、良い点は次の学年につなげ、学校全体に広げていく。自学自習の習慣化は難しい。 学力テストや実力テスト等の結果分析は各教科だけでなく、全体に共有し、学校全体としてのレベルアップに次年度もつなげていく。 未来塾や進路実現講座についても、内容や回数等今年度を振り返り、できるだけ改善を図っていく。
	区学力調査（全学年）・全国学力状況調査（9年）・実力テスト（9年年2回・7・8年年1回）実施結果の結果分析・対応策、実施。区学力テストは前年度の学習状況がでる）	どの学年も努力している。区の学力調査で若干国語と理科が下回った。 9年の実力テストについて一回目は国語と理科が標準点を超えていたが、2回目は数学と理科はほとんど同じ。英語・社会・3科・5科で標準平均点を超えてきた。	A	
	未来塾・進路実現講座の計画的な実施。 宿題・課題、タブレット内の課題の定期的な実施と確認できるようにする。	未来塾・進路実現講座と計画的に実施できている。	B	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立東海中学校

評価項目２　人間性や社会性に関すること

重点目標		本校の最重要課題 落ち着いた品位ある学校（大人になるための学校）として、 人としての在り方・生き方（キャリア教育）を大きな柱とする。		
評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	進路＝生き方　3年間の積み上げを計画に盛り込み・実施する。（P・D・C・A）	計画してきたものは、全校で各学年で行うことができた。	A	キャリア教育を基本に据えて取り組んできた。 行うことで確実な生徒の成長を実感できた。 次年度も継続していく。
	分掌の再編成で進路指導部立ち上げ、3年間を見通した取組等年間計画の作成・実施、決定し。東海中のベースを作る。	今年度行ってきたことを見直し、これを基本とする。	B	
②	規律と秩序ある生活態度を堅持する。	生徒会等で制服の着こなしの見える化や見直しについてのお試し期間も実施した。 日々の働きかけ・更なる教員の意識の確認をした。。	B	昨年よりも意識が高まり、きちんとしてきた。 決まりについての見直しについても、お試し期間やメリット・デメリットの話し合いも十分行ってきた。なんでも自由に・言いなりにはしない。高校入試等もあり、面接・学校訪問にいかれるのかなど、今後も品位ある生徒の育成を目指していく。
	「生活の決まり」を学年・学期はじめ等で確実に行い、学期終わりに振り返らせる。	学期はじめ、全校で。行事や学年集会で、集団としての意識は常に持たせるように働きかけてきた。	A	
	当たり前のことを当たり前に行わせる。（挨拶・返事・五分前行動・役割を果たす）	具体的に示している。例えば制服の着方等も具体的にイラストで各階段踊り場に掲示するなど工夫した。	B	
③	「落ち着いた品位ある学校」（大人になるための学校）の啓発・啓蒙を行う。	様々な機会をとらえて話し、行動を促してきた。また保護者たちにも保護者会や行事を通してなど具体的に示してきた。	A	学校が目指している「落ち着いた品位ある学校」（大人になるための学校）については保護者・地域等への理解は深まってきていると考える。 今後とも様々な機会を通して啓発に努め、理解・協力を仰いでいく。
	生徒へは全校朝礼等、日々の学校生活でより具体的に示し考えさせる。	校長講話・学校だより、生活指導主任の話・・・。常に「大人になるとは？」、問いかけ、日々の「成長」を伝えてきた。	A	
	保護者・地域に対しては、保護者会・学校だより、進路説明会等。また様々な仕掛けについてねらいや生徒たちの「成長」をしっかりと示し、理解を図る。	具体的な「成長」は機会あるごとに伝えてきている。保護者や地域・校区協働委員の感想でもねらいの達成や生徒たちの「成長」を実感しているものが多かった。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立東海中学校

評価項目３　体力・健康に関すること

重点目標		心身ともに健康な生徒の育成。（特に「心」の健康に力を入れる）		
評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	保健体育の授業のさらなる充実	授業について教員の目を増やすことで細やかな授業が進むと考えるが、まだ十分でない面もある。養護教諭とTTで行う授業の工夫もした。	B	保健体育の授業に多くの教員の目があり、指導助言できることで更なる充実が図れると考える。 領域・分野もあると考えるので年間指導計画の見直しをし、更なる充実を図っていく。
	区固有教員が配置され、各学年に1名の保健体育の教員がおり、そのほかに講師もあるので、よりきめ細やかな指導や取組ができる。	区固有教員を入れることで（このほかにも講師時数があるので）、何が具体的にできるのかを考えさせていく。	B	
②	運動が苦手な生徒等への対応	体育祭での種目や競技での配慮、欠席・見学者への対応を考え、実施した。	B	評価の問題もあり、課題やレポート提出やお手伝い等も行わせた。 体育祭の学年種目の内容等、学年の実態に合わせて工夫した。苦手であってもみんなと一緒に取組、一生懸命に取り組む姿勢を今後も評価していく。 スポーツトライアルでも楽しみながらみんなで取り組めるように今後も挑戦させていく。
	体育祭や学年行事等の種目の工夫。	体育祭では8年・9年の特に学年種目で配慮。球技大会などでも考えた。	B	
	スポーツトライアルへの挑戦やスポーツテストの結果分析等で前年度からの向上と今後について考えさせる。	運動能力の2極化があり、特に投げることに課題があった。球技の単元時に、種目の特性や知識を伝えると同時に、投げることの基礎的なトレーニングに時間を充実させてきた。スポーツトライアルに7・8年が挑戦した。	B	
③	個々の生徒の心模様に注目し学級・学年適応を目指す。	区が全校実施しているデイケン・NiCoLi、は計画的に実施。生活指導部会等で情報共有し、面談や対応策を立て、対応した。	A	心身の健康、特に心模様は思春期の子どもたちにとってとても大事である。様々な手法を使い、客観的なものと実際に個々の教員が肌で感じるものを大事にしながら、次年度も対応していく。 hyperQUも湘南DVの授業等、区で共通実施のものに加えて、次年度も継続できるように予算請求した。
	区が全校実施しているデイケン・NiCoLi、学校風土調査等確実実施。必要により面談。学校独自でhyperQU年2回実施で変容を見る。	hyperQUは2回とも分析・対応策を考え、全体共有し、学校全体で生徒を見た。今年度初めての湘南DVサポートセンターによるいじめ防止授業後のスクールバディ希望者が講習を受け、活動を始めた。	A	
	毎週の生活指導部会での情報共有やhyperQU分析等は担任・学年・全体で共有し、学校全体で当たる。	hyperQuおよびIチェックについては結果分析・対応策を2学期前に全体で情報共有し、対応策等みんなと共有し取り組みだ。 第2回のhyperQUの結果を受け、前回同様分析・前回からの変容・対応策考え、発表、全体で共有して3学期に臨んだ。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立東海中学校

評価項目４　いじめの防止の取組に関すること

重点目標	本校重要課題 人権意識の啓発・高揚を図り、人としての在り方・生き方を考えさせる。 いじめ防止・早期発見・早期対応・解決を目指す。			
評価指標	最上段：成果指標 2段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 2段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	生徒たちの実態把握・対応	日々の調査結果および行動観察等を中心に。気になったこと等すぐに話題にし、共有し対応するようにしてきた。	A	全て良いわけではないが細やかに対応して、健全育成に向けて学校だけでなく、関係諸機関にも協力いただきながら行ってきた。今後とも継続していく。
	全校実施の区のいじめ防止（デイケン・NiCoLi・いじめDアンケート・学校風土調査）の着実な実施。いじめ防止授業の年3回の実施をする。その際「いじめ根絶宣言」についても見直す。	いじめ防止の授業は計画的に行い、日常的に実践としている。	A	
②	学校独自の取組計画。	子どもたちの実態を考え、今後についての予算も考えた。次年度もhyperQUを全学年2回実施は要求。湘南DVについても次年度実施を要求した。	A	人間関係づくりが上手でない生徒が多々おり、特に7年生の時に問題が起こりやすい。そこで次年度も湘南DVのいじめ防止授業を継続申請し、バディとなった生徒たちが学習成果発表会で、今まで学んだこと・今後の予定を話すことで全校生徒の理解と応援をもらった。生徒による自治的な活動が東海中の伝統の一つになればと考える。 hyperQUについても客観的な資料として扱い、Iチェック結果等とも合わせて、変容だけでなく学級集団・学級経営・個々の生徒に着目させ、先生たちの力量UPも目指す。
	hyperQUの年2回実施。6月・11月実施により、変容を見て、対応策も考える。	第1回の分析や対応策をだし、全体共有し、2学期に全校で臨んだ。第2回を11月に実施。変容もみながら3学期に臨んだ。確実に良い方向に進んできた。	A	
	7年において湘南DVによるいじめ授業を1学期に計画・実施する。	6/16の全体会（保護者・生徒・教員）を終え、各クラスで授業を行い、7月中に終えた。自分たちでいじめ根絶のために取り組むスクールバディ養成は9月早々から実施した。12月の学習成果発表会舞台の部で、全校に紹介。スクールバディのポスター作成や今後の相談活動など具体的に示した。	B	
③	人権意識を高めるために様々な仕掛けを行う。	人権感覚について障害者・外国人・高齢者等、教員も生徒と共に学び、その後、教員独自の研修も組み込んだ。今年度を振り返り、見直しを行っていく。	A	生徒だけの学びから、そのあとでさらに深い研修を組み込んだ。人権意識は繰り返し繰り返し 学ぶ必要がある。生徒に仕掛けるとともに教員たちも更に学ぶ機会を作って、今後もいかに展開するか対応を考えていく。
	いじめはもちろん、高齢者・障碍者、外国人等様々な体験・講演会を組み込む。	9月に7年で敬老の日のメッセージの取組。10月に車いすマラソン（8年）。12月11日に全校でザンビア大使館と交流を行う。手話体験・国連事業等も。幅広く行った。	A	
	人権について全校で学び、標語やポスター作製を行う。	国語科・美術科を中心に要項確認。市民科の中で取り組んだ。 学校代表を「しながわ人権ひろば」2025に出品した。学習成果発表会展示の部でも校内に展示した。	B	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成

令和７年度　学校評価　品川区立東海中学校

公開

評価項目５　（特色ある教育活動に関すること）

重点目標	９年は「学校の顔」・８年は「学校の背骨」・７年は「中学校生活の土台作り」を基本として学校として筋の通った生徒の取組、育成を図る。			
評価指標	最上段：成果指標 ２段目以降：取組指標	最上段：成果指標の達成状況の説明 ２段目以降：取組指標の達成状況の説明	評価	今後の課題と改善策
①	伝統的な取組の継承	「拭き掃除」は2学期・3学期の始業式の日に全学年で実施できた。意義について再度話さないとなかなか教員たちに徹底しない面もある。	B	己を見つめることを本校としては大事にしていく。 「拭き掃除」という形をとるが無心になって向き合う時間を今後も作っていく。
	「拭き掃除」で己と向き合い・心を磨く。学期に1回、目標設定の際などうまく活用する）	今学期どうしていきたいのか考えさせながら生徒たちは取り組ませた。	B	
②	異学年・縦割り交流の充実	計画的に意識して取り組めている。様々な行事の中で縦割り等で練習方法等含めてアドバイスした。	A	先輩から後輩へ。それぞれの学年が「学校の顔」・「学校の背骨」・「中学生の土台作り」を意識して生活し、異学年交流を進める中で本校の伝統を伝えていた。 先輩の背中・言動から学べるように今後も指導をしていく。
	新入生歓迎行事や8年から7年への校舎案内・9年から7年への礼法指導。9年から8年への進路に向けてなど、計画的に与え、先輩としての「範」を示させる。	先輩から後輩へ。「学校の顔」として、「学校の背骨」として、「中学生の土台作り」として、今年度どうであったかを振り返らせ、次年度どうあるべきかを考えさせた。	A	
	体育祭・音楽祭は先輩から後輩に兄弟学級等で学び合い・教え合いを行う。4―4－3学級のため完全な縦割りにはならない。	完全な縦割りにならないところを9年が様々な工夫をして後輩たちの指導にあたった。9年生を送る会では逆のパターンが見られた。	A	
③	生徒会としての自治活動・ボランティア活動の更なる推進。	校則の即改正ではなく、きまりの意義・なぜあるのか。メリット・デメリットについて生徒会役員と教員の中で考えていくようにした。またおためし期間を取り、検証を行った。自分たちの問題としてという意識と、様々な面からの検討をし、今後より良い形にしていく。	B	ボランティア活動は定着してきており、地域の方たちと一緒にさせていただくことで、本校の学校理解や生徒たちの良さも感じられていると考える。 生徒会のクリンレンジャー・水平リサイクルについては継続していく。今後も枠の中で自治的な活動を推進していく。
	東海Gとして児童・生徒会交流を7月・夏休み入ってすぐに実施。クリンレンジャーや水平リサイクル等話題とする。	東海Gとして、7月に懇談会を実施した。次年度へ向けて市民科一貫プランで更なる工夫・検討していく。	B	
	年間を通して地域行事へのボランティア等、学校全体で取り組み、地域への貢献を経験させる。	ボランティアの年間計画が示され、教員たちも担当を決めた。様々な機会に募集をかけ、よく努力をし、地域に貢献してきた。 活躍の場が多かった。小学生のマラソン大会も依頼がきて参加した。	A	

A＝十分達成できた　B＝おおむね達成できた　C＝未達成